

## 無名抄『深草の里』確認テスト（俊成自讃歌） 解答・解説

### ■ 解答・解説

問1 訳：「五条三位入道（＝俊成）のもとに参上した。「まうで」は謙讓語（「参る・参上する」の意の「まうづ」）。話し手である俊恵から、訪問先である俊成（五条三位入道）に対する敬意を表す。

問2 (1) 鴨長明（かものちょうめい）。(2) 『方丈記』（随筆）。(3) 歌論書（広く「歌論」とも）。(4) 『千載和歌集（千載集）』（藤原俊成が単独で撰した勅撰和歌集）。

問3 「（それを）採用するわけにはいきません／用いるべきではありません」。世間の人々の評価は当てにせず、俊成本人の判断を直接聞きたい、という文脈。

問4 訳：「夕方になると、野辺を吹く秋風が身にしみて感じられ、（そのなかで）鶉が鳴いているのが聞こえる、この深草の里では。」秋の夕暮れのもの寂しい情趣を詠む。

問5 （例）「歌の余情を直接『身にしみて』と言葉に出して説明してしまい、言外に感じさせる奥ゆかしさ（幽玄）を損なっているから。」（約四十字）

問6 美的理念：幽玄（余情・余韻でもよい）。第三句への評価の語：無念（「いみじう無念」）。「身にしみて」と言い切ったために、言外の余情がそがれて「無念」だと評している。

問7 (1) 伝聞・推定の助動詞「なり」。ここでは鶉の鳴き声を耳で聞いて述べる推定（～が聞こえる・～ているようだ）の意。(2) 直前の「鳴く」が終止形であることから、断定の「なり」（体言・連体形接続）ではなく、終止形接続の伝聞・推定の「なり」と判断できる。

問8 （例）「人前に出して恥ずかしくない自信作・代表歌。」（十五字以内）

問9 （例）満開の桜の美しい姿を心に思い描き（面影に立て）、その面影に誘われていくつもの峰を越えて来た、その行く手の峰にかかる白雲よ、という歌。实景よりも心に浮かぶ「面影」の美を主題とし、華やかで余情に富む。

問10 イ。完了（強意）の助動詞「ぬ」の終止形。なお「来（き）ぬ」の「き」はカ変「来（く）」の連用形で、これに完了「ぬ」が付く。打消「ず」の連体形「ぬ」なら直前は未然形「来（こ）」となるため区別できる。

問11 訳：「さあ、（私には）どうだか。世間ではそのように評価しているのでしょうか、（私には）わかりません。」自分の代表歌は深草の里の歌だ、という前段を承けて、世評には深入りせずやんわりかわす俊成の言葉。

問12 ア。「いさ」は下に打消や不確かな言い方を伴い、「さあ（どうだか）・さあ知らない」と、判断を保留する語。

問13 現在推量（～ているのだろう）。目に見えない他所での世評を押し量る用法。

問14 「これ」＝「身にしみて」という第三句（腰の句）を直接的に言い表したことで、すなわち深草の里の歌の表現上の難点を指す。この「これをうちうちに申ししは…」以降は、俊恵が（弟子の長明に）内輪の本

音として語った批評であり、語り手は俊恵（それを記録するのが鴨長明）。

---

問15 イ。ここでの「景気」は景色・情景、転じて歌のかもし出すおもむき・余情を指す。

---

問16 訳：「何とも言いようがなく（すばらしい）。」「いはむかたなし」＝言いようがない。「む」は婉曲（～ような）／仮定の用法で、「言おうとする方法もない」の意。

---

問17 「心にくし」＝奥ゆかしい・上品で深みがある。直接的でなく、心ひかれるような趣の深さをいう。

---

問18 「おぼゆる」の終止形はおぼゆ、「見ゆる」の終止形は見ゆ。〔⑧〕が連体形「おぼゆる」になっているのは、直後に断定の助動詞「なり」が付いており、「なり」が連体形接続であるため（「無念におぼゆるなり」）。

---

問19 （例）「はっきり言い表した部分は少なく、言葉の外に自然とにじみ出る余情によって、奥ゆかしい趣をたたえているのが優れた歌だ、ということ。」（約四十字）

---

問20 (1) き。(2) 過去（自分が直接体験した過去）。連体形「し」が直後の体言的内容「ついで」にかかる。俊恵が実際に俊成のもとを訪れた経験を回想している。

---

問21 エ（当然）。打消「ず」を伴い「～べきではない・～わけにはいかない」と訳す当然・適當の用法。

---

問22 「夕されば」＝「夕方になると」。「さる」は「(時が) 来る・なる・移り近づく」の意の動詞で、「夕さる」で「夕方になる」。已然形＋「ば」で順接の確定条件（～すると）を表す。

---

問23 俊成自身は「夕されば…深草の里」の歌を自分の代表歌（おもて歌）として最も優れているとし、面影の歌とは「言ひ比ぶべからず（比べものにならない）」と述べる。一方世間の人々は「面影に花の姿を…」の歌を優れていると評価している。両者の評価は分かれている。

---